

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 21 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320059

研究課題名(和文) デジタルアーカイブズと英国初期近代演劇研究 劇場、役者、印刷所を繋ぐネットワーク

研究課題名(英文) Digital Archives and Early Modern English Theatre: The Network of Playhouses, Players, and Printing-houses

研究代表者

加藤 行夫 (KATO, Yukio)

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：30092927

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主として英国初期近代(エリザベス朝およびジェームズ朝)の演劇作品および当時の役者・劇団・劇場の総合研究を「歴史実証主義的立場」から新たに検証し直す作業を行なった。とくに「デジタルアーカイブズ」を多用して、定説と考えられてきた既存の概念・理論を、現存する公文書や有力な歴史的基礎資料を根幹とした「検証可能な方法」で再検討し直すことを最大の特徴とした。

この研究手法により、当時の劇作家、幹部俳優、劇場所有者、印刷出版業者等をはじめとした「演劇世界全般の相関的ネットワーク構築」の特徴的なありようを、演劇理論や劇作家と劇団研究、個々の劇作品とその出版等を通して追究した。

研究成果の概要(英文)： This project employed the methodologies of historical positivism in order to reexamine comprehensively the many facets of Early Modern English (i.e. Elizabethan and Jacobean) drama, ranging from the plays to the actors, acting troupes, and the theaters. What particularly distinguishes this project is its use of digital archives. By making use of such archives, it was able to reassess established notions and theories through a process of verification; each of the notions and theories were reexamined through close investigation of extant public records and major historical records.

By applying this methodology to research into stage theory, playwrights, acting troupes, individual plays, and the publication of these works, this project attempted to create an interconnected network of the many aspects of the theater world of the period, which includes playwrights, major actors, theater owners, printers, and publishers.

研究分野：英文学、イギリス文学

キーワード：エリザベス朝 演劇 シェイクスピア

1. 研究開始当初の背景

シェイクスピアをはじめとするルネサンス演劇研究の当初の背景は、新歴史主義やフェミニズム系統の理論派による作品批評の興隆がほぼ収束し、新たに文化研究の視点から見た演劇研究や、グローバル化またはローカル化した「上演・パフォーマンス研究」へとシフトしつつあった。

しかしその一方で、2010年には別の動きもあった。ローズ劇場の詳細な記録を保存していた *Henslowe's Diary* や、ルネサンス期演劇の総合的研究では代表的な E. K. Chambers による *The Elizabethan Stage* (全4巻) が再刊行され、演劇とその周縁世界との相関関係への「歴史主義的関心」が未だ弱体化していないことを示した。また日本シェイクスピア協会が2012年に発刊した創立50周年記念論文集のタイトルには、『シェイクスピアと演劇文化』という表現が使われ、演劇を俳優・演劇関係者や印刷・出版界の人物たちによって織り成される総合的ネットワークの産物 (= 演劇文化) として把握しようとする姿勢が明らかになっていた。

2. 研究の目的

本研究は、歴史実証主義的視点から演劇界全体を見直す総合的作業であり、特に最近発展と拡大が顕著なデジタルアーカイヴズを使って、現存する演劇関連の手稿記録 (マニュスクリプト)、公文書、および同業者組合関連記録、作品の古版本等の物的証拠を網羅的に検証し直し、またデータベースを使った定量・定性的な本文研究を実践することを目的とした。これにより初期近代演劇におけるネットワーク構築を「広範囲な証左の収集および再検証」を通して明らかにしようとした。

デジタルアーカイヴズの大きな特徴は、高い潜在価値を有する「未刊行の歴史的資料」への直接的なアクセスを可能にすることであり、それにより最先端の情報を盛り込んだ最新の学説を公表し、従来の議論を新たな見

解から見直すことが可能になる点にあった。

3. 研究の方法

本研究は、歴史実証主義的手法に基づいて、英国初期近代演劇を、劇作家、幹部俳優、劇場所有者、印刷出版業者等をはじめとした「演劇世界全般の相関的ネットワーク」の所産として捉えようとするものであった。そのためにもまず、近年めざましい進歩を遂げつつあるデジタルアーカイヴズを多用し、インターネット上で公開されているマニュスクリプトや初期版本、また膨大な数の当時の公文書や古文書資料の精確な読解と分析を行った。それらの資料に基づき、演劇作品、劇作家、俳優とパトロン、劇場と地方公演、印刷と出版に関する一次資料について、精読と分析という文献学的な手法による基礎研究を行った。

4. 研究成果

平成23年度は、劇作品の構造を手稿本から再度検証し直し、悲劇の構成要素、マルチプル・プロット戦略、stage direction や観客の視点等を分析した。

従来の研究においては、古版本のテキストを (様々な異本の存在にも拘わらず) 当然の前提として、劇作品を解釈して来たが、本研究では W.W.Greg, *Dramatic Documents from the Elizabethan Playhouses* や The Malone Society's *Collection Volumes* などを再度精査することで「手稿本」に立ち返り、マニュスクリプトから印刷本へ至る道筋を再検証しようとするものである。

また、これらの劇作品が持つ意味を、その劇的な構成要素、プロット構造、stage direction や観客の視点等に的を絞って究明した。Stage direction の問題や観客の反応については、従来も注目課題の一つとしてしばしば取り上げられて来たが、本研究では、手稿本から印刷本が出来上がるプロセスにおけるト書きの変容を丹念に跡づける作業

を通し、ト書きや観客反応の問題を解明した。

平成 24 年度は、“ODNB (Oxford Dictionary of National Biography)”, “Shakespeare Authorship Page”, “Biographical Index of English Drama Before 1660”をはじめとしたデジタルアーカイヴズ等を使い、劇場・劇団・役者に密接に関連する情報を抽出し、文献学的に厳密な手法で読解作業を行った。

英国初期近代演劇においては、近代劇とは異なって、個々の劇作家の個性と才能もさることながら、劇作家を取り巻く劇場の経営者たち、劇団の幹部と俳優といった、これまでは劇作家の周辺に存在していたにもかかわらず、劇作家の作劇には本質的な影響を与えたとは見なされていなかった人物とそのネットワークが、演劇の生成過程に関わる重要な要素として認められつつあるが、当年度はこのネットワークに焦点を当てた研究を行った。

平成 25 年度は、劇団の地方公演の実態、貴族の庇護とプロテスタントの反発、バラッドの出版、パンフレット作者と演劇の問題等を、現存する資料から再考察を試みた。英国初期近代演劇においては、劇作家のみならず、劇団と劇場、彼らを庇護するいわゆるパトロンとしての貴族、あるいは手稿本を印刷する印刷業者たちが複合的に関与しながら、演劇という舞台芸術を成立させていた。しかしながら、従来の研究では、専ら作品の内的な要素のみに焦点が当てられ、作品を取り巻くこれらの外的な要因に関する研究が手薄であった。

また首都ロンドンを離れた劇団が行っていた「地方公演」というテーマについては、まだ日本での研究はかなり手薄である。本研究では“REED (Records of Early English Drama)”などのデジタルアーカイヴズを利用して、当時の地方公演の膨大な情報を収集し、精密な調査と読解、それらを基にした劇団と地方公演、パトロンとの関係を明らかに

した。

平成 26 年度は、文学史の表面に現れないマイナーな劇作家と作品、また無名の観客が残した観劇記録、地方巡業の記録などに依拠し、興隆する初期近代英国演劇の「底流」の考察を通し、「本流」の再考察への道筋とした。

当年度は最終年度に当たり、本研究の最終段階として、いわゆる演劇の本流に対する傍流の流れを、無名の劇団と劇作家、またそれらの公演に訪れたであろう観客に焦点を当てた。前年度同様、マニュスクリプトや公文書、古文書等の未公開の歴史的資料を掘り起こしつつ、“REED (Records of Early English Drama)”のデジタル化された資料も活用して、隠れた地方公演に表れる貴族と劇団・役者のネットワークを探りあてる作業を行った。

周知のように、日本、あるいは世界における英国初期近代演劇研究は、シェイクスピア、クリストファー・マーロウ、あるいはベン・ジョンソン等、すでに古典的な地位を獲得した劇作家についての研究が中心であり、これらの作家たちを除くいわゆる本流から外れた劇作家や劇団については、これまでほとんど未開拓の分野であった。本研究に参加する研究者たちは、その多くが『エリザベス朝演劇事典』(外山滋比古監修、岡本靖正他編、みすず書房、近日刊行予定)の執筆陣であるが、本事典は、シェイクスピア以外の劇作家たちの作品の内容とその執筆年代、あるいはソース等について、ほぼ網羅的に説明した画期的な事典である。本研究は、本事典の成果も十分取り入れながら、さらにそれを発展させて、“Literature Online”というデジタルアーカイヴズから調査できる既存の先行研究を、新しい歴史的資料の文献学的な調査と融合させながら、英国初期近代演劇のマイノリティたちのネットワークについて、これまで発見されて来なかった新しい知見を多

く得ることができた。

最終年度終了後、4年間の研究の成果を整理しつつ、これまでに得た成果を盛り込んで、12人の共同執筆による論文集『シェイクスピア時代の演劇世界 - Theatre in the Shakespearean Age -』（九州大学出版局、2015年）を出版することが確定した。なお、本論文集は、平成27年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）「研究成果公開促進費」を獲得して出版されるものである。

5. 主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 20 件)

加藤行夫、回顧と展望 シェイクスピアの研究、『英語年鑑 2015』研究社、査読有、2015、26-29

佐野隆弥、エリザベス朝散文とその後(2) 17世紀科学革命期を中心に、『文藝言語研究文藝篇』、査読有、第67巻、2015、9-21

松田幸子、名誉革命とブリテン島征服 ドライデン『アーサー王』(1691)における女性の認識、オベロン、査読無、41(1)、2015、28-38

加藤行夫、回顧と展望：シェイクスピアの研究、『英語年鑑 2014』研究社、査読有、2014、26-29

Kazutaka Tanaka、The Multiple Plot Structure of Robert Greene's *Friar Bacon and Friar Bungay*: A New Perspective、*Shakespeare Studies*、査読有、第51巻、2014、1-20

杉浦裕子、ベン・ジョンソンの『へぼ詩人』と少年劇団、『英文学研究』支部統合号（『九州英文学研究』）、査読有、第6巻（『九州英文学研究』第30号）、2014、397-406

本山哲人、Teaching Shakespeare to Law Students、*Teaching Shakespeare*、査読有、6、2014、10-11

加藤行夫、回顧と展望：シェイクスピアの研究、『英語年鑑 2013』研究社、査読有、2013、25-28

Chiaki Hanabusa、The Will of Simon Jewell and the Queen's Men Tours in 1592、*Early Theatre: A Journal Associated with*

the Records of Early English Drama、査読有、16.1、2013、11-30

勝山貴之、歴史劇と初期資本主義経済 - *Richard III* における“property,” “credit,” “bankruptcy”、*Shakespeare News*、査読有、53.1、2013、21-30

真部多真記、歴史劇の可能性を求めて『ヘンリー六世』第二部における庶民について、『シェイクスピアを教える』（成蹊人文叢書 10、成蹊大学文学部学会編）査読有、2013、29 - 64

本山哲人、Kaoru Edo、Strange Oelliades No More: *The Three Daughters of Lear* from the Tokyo Shakespeare Company's "Shakespeare through the Looking-glass"、*Shakespeare*、査読有、9.4、2013、462-480

加藤行夫、回顧と展望：シェイクスピアの研究、『英語年鑑 2012』研究社、査読有、2012、25-28

佐野隆弥、『夏の遺言』と反知性主義 トマス・ナッシュとパトロンの問題、『シェイクスピアと演劇文化』（日本シェイクスピア協会編）査読有、2012、119-134

田中一隆、Shylock の nationalism *The Merchant of Venice* における nation と (e)state について、『東北英文学研究』、査読有、第2巻、2012、1-8.

英 知明、役者の「遺書」は何を語るか サイモン・ジュエルと女王一座、日本シェイクスピア協会編『シェイクスピアと演劇文化』、査読有、2012、196-215

Chiaki Hanabusa、“Simon” and the Date of George Peele's *The Old Wives Tale*、*Notes and Queries*、査読有、59、2012、508-511

勝山貴之、女王陛下の少年劇団 劇団・劇場・宮廷上演、『主流』、査読有、74、2012、1-19

杉浦裕子、劇場戦争前後の『お気に召すまま』と『終わりよければすべてよし』、『鳴門英語研究』、査読有、23、2012、1 - 17

松田幸子、王政復古期の「宗教戦争」 *The Duke of Guise* における英仏の「パラレル」、*Shakespeare News*、査読有、51(2)、2012、26-37

〔学会発表〕(計 28 件)

真部多真記、トマス・デッカー『バビロンの娼婦』とアルマダの記憶、第19回エリザベス朝研究会、2015年3月17日、慶應義塾

大学(日吉)(神奈川県横浜市)

加藤行夫、明治期シェイクスピア翻訳再考、第18回エリザベス朝研究会、2015年1月31日、慶應義塾大学(日吉)(神奈川県横浜市)

加藤行夫、悲劇の座標軸、日本比較文学会東北支部大会、2014年11月1日、弘前大学(青森県弘前市)

田中一隆、悲劇とは何か 二つのロミオとジュリエットの物語をめぐって、日本比較文学会東北支部大会、2014年11月1日、弘前大学(青森県弘前市)

杉浦裕子、小林潤司、石田由希、山田恵理香、私設劇場の観客の眼に映った『輝けるすりこぎ団の騎士』、イギリス文学部門シンポジウム「可視/不可視の劇場 イギリス演劇と視覚性」、日本英文学会九州支部第67回大会、2014年10月25日、福岡女子大学(福岡県福岡市)

松田幸子、名誉革命とブリテン征服: King Arthur (1691)における国家意識と女性、第17回エリザベス朝研究会、2014年9月6日、慶應義塾大学(日吉)(神奈川県横浜市)

辻照彦、『ハムレット』における親書書き換えのエピソードをめぐって、第16回エリザベス朝研究会、2014年6月7日、慶應義塾大学(日吉)(神奈川県横浜市)

杉浦裕子、Concord in Discord John Lyly・少年劇団・宗教、日本英文学会第86回大会、2014年5月25日、北海道大学(北海道札幌市)

田中一隆、Shakespeareにおけるastrology概念とその翻訳 演劇言語の翻訳について、日本比較文学会東北支部・北海道支部共催比較文学研究会、2014年3月29日、北海道大学(北海道札幌市)

佐野隆弥、John Lyly's Campaspe (1584) 2つの「初演」からのアプローチ、第15回エリザベス朝研究会、2014年3月8日、慶應義塾大学(日吉)(神奈川県横浜市)

西原幹子、Arden of Favershamにおける社会的地位の流動化と主体の問題について、第52回シェイクスピア学会、2013年10月5日、鹿児島大学(鹿児島県鹿児島市)

真部多真記、市民が紡ぐ歴史劇 トマス・ヘイウッド作『私をご存じなければ、どなたもご存じない』、第52回シェイクスピア学会、2013年10月5日、鹿児島大学(鹿児島県鹿児島市)

松田幸子、The Injured Princess (1682)におけるパストラルの破綻: Cymbeline 改作にみるブリテン像の変遷、第52回シェイクスピア学会、2013年10月5日、鹿児島大学(鹿児島県鹿児島市)

真部多真記、『私をご存じなければどなたもご存じない』にみられる新しい勝利のかたち、第12回エリザベス朝研究会、2013年5月11日、慶應義塾大学(日吉)(神奈川県横浜市)

加藤行夫、鴉外の『マクベス』訳、エリザベス朝研究会、2013年3月9日、慶應義塾大学(日吉)(神奈川県横浜市)

本山哲人、Edo Karou, Strange Oelliades No More: The Three Daughters of Lear from the Tokyo Shakespeare Company's "Shakespeare through the Looking-glass", Shakespeare and Japan: A One-day Conference, De Montfort University (26 Feb. 2013), Leicester (United Kingdom)

山下孝子、Menacing Bodies in Titus Andronicus、第10回エリザベス朝研究会、2013年1月26日、慶應義塾大学(三田)(東京都港区)

松田幸子、Un-British Cymbeline: The Injured Princess (1982)における王位継承、オベロン会10月例会、2012年10月27日、国際文化会館(東京都港区)

石橋敬太郎、『ヘンリー六世』三部作における女性と歴史編纂、第51回シェイクスピア学会セミナー、2012年10月14日、秋田大学(秋田県秋田市)

真部多真記、『ヘンリー六世第二部』における庶民について、第51回シェイクスピア学会、2012年10月14日、秋田大学(秋田県秋田市)

21 杉浦裕子、「ベン・ジョンソンの『へぼ詩人』と少年劇団」、第51回シェイクスピア学会、2012年10月13日、秋田大学(秋田県秋田市)

22 石橋敬太郎、「Bussy d'Amboisにおける自然と人間について」、第9回エリザベス朝研究会、2012年9月1日、慶應義塾大学(日吉)(神奈川県横浜市)

23 勝山貴之、女王陛下の少年劇団 劇団・劇場・宮廷上演、関西シェイクスピア研究会、2012年6月24日、大谷大学(京都府京都市)

24 田中一隆、Henry Medwall, Fulgens and Lucrez プロット構造の観点から、第8回エ

リザベス朝研究会、2012年6月16日、慶應義塾大学(日吉)(神奈川県横浜市)

25 英 知明、女王一座サイモン・ジュエルと George Peele, *The Old Wives' Tale* (1595)、第84会日本英文学会、2012年5月27日、専修大学生田キャンパス(神奈川県川崎市)

26 加藤行夫、悲劇論その後、第6回エリザベス朝研究会、2012年1月21日、慶應義塾大学(日吉)(神奈川県横浜市)

27 松田幸子、Re-imagined French Civil War in *The Duke of Guise*、第6回エリザベス朝研究会、2012年1月21日、慶應義塾大学(日吉)(神奈川県横浜市)

28 加藤行夫、悲劇の諸相、日本大学英文学会、2011年9月、日本大学文理学部(東京都世田谷区)

〔図書〕(計4件)

岡本靖正、加藤行夫、佐野隆弥、田中一隆、辻照彦、英知明、勝山貴之、石橋敬太郎、杉浦裕子、真部多真記、西原幹子、松田幸子、九州大学出版会、*シェイクスピア時代の演劇世界 - Theatre in the Shakespearean Age -*、2015、(ページ数未定)

Chiaki Hanabusa、*Two Lamentable Tragedies* (Malone Society Reprints, vol. 180)、Manchester University Press、2013、107ページ

Kazutaka Tanaka and Masahiro Imai (eds)、*Archaeology of Intellectual Aspects of European Culture: A Volume of Articles Based on the Project of International Collaborative Research*、弘前大学人文学部、2012年、111ページ(担当77-92ページ)

杉浦裕子、村里好俊訳、マイケル・ガーデ著、岩波書店、トマス・グラバーの生涯 大英帝国の周縁にて、2012、320ページ

〔その他〕
ホームページ等

エリザベス朝研究会
<http://elizabethan-theatre.org/wps/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 行夫 (KATO, Yukio)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：30092927

(2) 研究分担者

田中 一隆 (TANAKA, Kazutaka)
弘前大学・人文学部・教授

研究者番号：10227126

山下 孝子 (YAMASHITA, Takako)
鹿児島国際大学・経済学部・准教授
研究者番号：70224623

英 知明 (HANABUSA, Chiaki)
慶應義塾大学・商学部・教授
研究者番号：60228518

佐野 隆弥 (SANO, Takaya)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号：90196296

辻 照彦 (TSUJI, Teruhiko)
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：30197678

勝山 貴之 (KATSUYAMA, Takayuki)
同志社大学・文学部・教授
研究者番号：30204449

石橋 敬太郎 (ISHIBASHI, Keitaro)
岩手県立大学盛岡短期大学部・国際文化学
科・教授
研究者番号：80212918

杉浦 裕子 (SUGIURA, Yuko)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准
教授
研究者番号：50412846

真部 多真記 (MANABE, Tamaki)
常磐大学・人間科学部・准教授
研究者番号：30364483

西原 幹子 (NISHIHARA, Mikiko)
沖縄国際大学・総合文化学部・准教授
研究者番号：80369199

松田 幸子 (MATSUDA, Yoshiko)
高崎健康福祉大学・人間発達学部・講師
研究者番号：10575103

本山 哲人 (MOTOYAMA, Tetsuhito)
早稲田大学・法学学術院・准教授
研究者番号：20386527

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

岡本 靖正 (OKAMOTO, Yasumasa)
東京学芸大学・名誉教授
研究者番号：60015758